【研究ノート】

朝鮮半島と日本における農楽活動史

History of *Nongak* (Korean Farmer's Music-Dance) Activity in Korea and Japan

橋本みゆき†

1　はじめに

筆者は神奈川県の在日コリアン多住地域で活動するチャンゴの自主サークルに参加して15年になる。チャンゴ（장고、杖鼓）[1]とは朝鮮半島の伝統打楽器の一つで、「農楽」の主要な楽器である。サークルの定例稽古のほか、会／個人としてイベントに出演することもある。仲間との演奏で少しずつ音が合って形になっていき、それを共有する関係が楽しく、また地域の祭りで在日コリアン高齢者をはじめ大勢の観客と一緒に盛り上がるのが快感で、下手の横好きながらも続けてきた。しかしここ数年で、高齢化の波やコロナ禍のなかで存続の危機に何度か陥った。さしあたり継続できているものの、いつまでもあって当たり前なのではないのだと思い知り、改めてその意義を考えたのだった。

本稿は、朝鮮半島および日本における農楽活動の歴史的展開を整理し、農楽の社会的意味を考察する。これは、農楽の実践記録と社会学的研究に向けた、筆者の第一歩でもある。以下、第２章で農楽の定義と本稿の着眼点を示した後、第3章では、戦前の朝鮮半島および現代韓国の農楽と、戦後日本における「民族まつり」について文献研究を行う。そして第4章で、過去の新聞記事を通じて、日本における農楽の担い手・参加者と実践内容に関する若干の分析を試み、最後に、現時点で見えたことと今後の課題を確認する。

写真１　全羅南道の「谷城竹洞農楽」

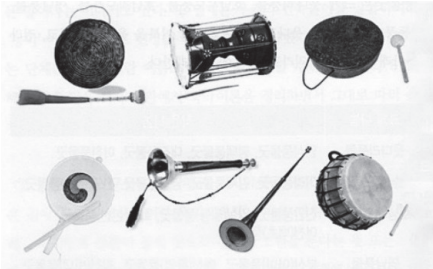

写真２　農楽に使われる代表的な楽器[2]

（出所）『民団新聞』2014.11.5（2枚とも）

†立教大学社会学部兼任講師　5522825@rikkyo.ac.jp

2　農楽とは

演劇学者の金両基によると、農楽とは、狭義には、農村共同体で田植えや除草の作業を推進するため、また慰安のために演奏される舞楽をいう。歌、踊り、演劇行為を含めた広義の楽でもある。古来から農楽は、朝鮮庶民の娯楽、生活手段であった。用いる楽器と、個人ではなく部落が単位となって行われる点は共通であるが、目的や地理的条件により名称[3]が多様にある（金両基1966）。「農楽」という表現が初めて使われたのは植民地期（1910-45年）といわれる。しかし資料で多く用いられていることから、本稿では「農楽」という語を総称として使うことにする。なお韓国では、1980年代以降、民主化運動で民衆の力を象徴する民俗芸能としても取り入れられ、プンムル（풍물、風物。もとは農楽の楽器を表す語）と呼ばれている（神野2016:4）。

つまり農楽は、一連の伝統楽器を用いて共同体に根差した目的を担って行われ、今に続く、朝鮮半島生まれの民俗芸能である。今日では世界中のコリアン居住地で行われていて（임・주 외2015）、日本でも日本在住のコリアンをはじめとする担い手がいる。

『民団新聞』は農楽を、「村の共同体の和合と住民の安寧の祈願に向け、伝統打楽器等を合奏のみならず演劇等も繰り広げる総合芸術」であると説明する。この記事は冒頭で、農楽が2014年にユネスコ世界無形文化遺産に登録されたことに触れ、それは韓国17件目の登録であるという（民団新聞2014.11.5）。同紙は在日本大韓民国民団（民団）[4]の機関紙である。現代韓国にとっても在日コリアンにとっても、農楽は、新たな意義を付加された伝統文化であると言えよう。

韓国の民俗学者・鄭昞浩は、農楽芸能の重要性は、①共同体哲学から生まれた点、そして②芸能自体の優秀さにあるという（鄭昞浩1986）。愛好者としては２点目に全く同感であり、楽器を担いで演奏しながら観客と踊る、陽気で楽しい音楽ジャンルである。ただし本稿がより着目したいのは１点目の、共同体から生まれたという点である。農楽に映し出される共同体哲学とはどんなものか。今後の農楽活動研究の予備的考察としたい。

3　朝鮮半島および日本における農楽活動の展開

ここでは朝鮮半島、そして戦後日本における農楽活動の歴史を、文献から概略的にまとめる。

3.1　朝鮮半島における歴史的展開

鄭昞浩の著書『農楽』（1986）は、朝鮮半島の農楽史を概観できる基本文献である。鄭によると、農楽が盛んに行なわれてきたのは、トゥレが発達した農村平野部である。トゥレとは、農繁期に共同して協力するために作られた農民の集まりであり、トゥレ成員は能力において平等とみなされ、共同労働、会食、歌舞を共にした。そうした農耕生活には必ず農楽があった。朝鮮王朝時代中期まで、階層の別なくみんなが農楽を楽しんだが、統治者は、民衆を団結させるとして農楽を警戒することも、逆に農民の反発を

発散させようと放置することもあった。

農楽が軍事転用された19世紀末から植民地時代、朝鮮戦争（1950-53年、現在も休戦中）を経て西洋化が進んだこの時期を、鄭は受難期だという。とりわけ植民地体制下では農楽が禁止され、第二次大戦中は農楽器まで供出させられた。受難期を通じて、村落共同体の解体も進んだ（鄭昞浩1986）。

『部落祭（朝鮮の郷土神祀 第１部）』（1937）は、1936年に朝鮮総督府が朝鮮半島全土で行なった洞祭（村祭り）に関する調査の報告書である。洞とは、集落１～３個を合わせた名称で（吉田1996：312）、この調査でも、舞楽を伴う洞祭が観察されている。執筆にあたった総督府嘱託の村山智順いわく、20 ～ 30年前から革新の機運、迷信行為取り締まり、生活改善の提唱があり、各種行事が検討に付され、その影響を最も受けたのが、洞祭に伴う舞楽だった。「この音楽・舞踊・脱線振・どよめきこそ」は「此上なき娯楽」であり、そのためややもすると「祭場を酒池肉林の不浄地たらしめる弊」がある。そしてこの弊に陥る最たる理由は、「只なすがまゝに放任して居た当時の地方官又は地方有識階級たる者」にあるとする（朝鮮総督府1937:401-6）。

村山の筆致には、日本による教化を正当化しようとする、植民地支配の「構図」（野村伸一ウェブサイト）がつきまとう。けれどもどこか、農楽そのものや村人の楽しみに対する共感や羨望があるようにも思われる。村山は、洞祭では「社會共同的精神が流れ幾多の美しき傳統文化が保持され」、それを「眞摯に擧行して居る部落が概して健全なる部落生活を行ひつつある」と述べる（朝鮮総督府1937：3）。各道の情報をまとめた一覧表「部落祭神楽の要領」には、舞楽（宗教儀礼である巫楽を含む）の具体例が列挙されており、表１に、全羅南道の部分を抜粋した（朝鮮総督府1937: 401-13）。祭りを楽しむ人々の様子を伝える記述から、調査にあたった役人もウキウキしていたのではないかと想像する。

表１　「部落祭神楽の要領」より全羅南道部分の抜粋

地方名	種類及名称	誰が	どんな風に行うか	時	所	備考
光州府	神楽	楽隊	錚、鼓、喇八を持った楽隊十数名洞祭儀に参列して奏楽す	正月上旬上戌日午前２時頃		
高興郡		洞民	洞祭日は部落民業を休み、錚、鼓を打ち鳴らし、踊りながら１日を楽しむ行事あり	正月 14 日夜中		
寶城郡	別神		農楽を行う	正月 15 日夜		
和順郡		洞民	洞祭日洞民業を休み神樹周囲にて奏楽して遊興す	正月 14 日夜中		
長興郡	農楽	洞民	洞祭日行祭の際農楽を打ち鳴らす	正月 15 日夜		
海南郡	農楽	洞民	祭祀翌日は休業し、１年間部落の諸災難予防の意味で錚鼓を鳴らして部落内を廻る	正月 15 日		
羅州郡	農楽	洞民	祭祀当日洞民総出動し農舞楽を奏し一同歓楽す	正月 15 日		
霊光郡	農楽	洞民	祭祀当日農楽を行い踊り楽しむ	正月初旬		
長城郡	農楽	部落民 7、8 人	祭儀に附帯して部落民７、８人は農楽器を打ち鳴らし神域内を巡回し翌日の午前２時（鶏鳴時）に終る	正月 14 日		

＊朝鮮総督府（1937:409-10）より作成。旧仮名遣いと旧字体は現代のものに改めた。

朝鮮総督府は農村振興運動（1933年～）[5]や心田開発運動（1935年～）[6]を通じて、日本的要素を入れた祭祀を通じて農民統合を模索した。青野正明は、『部落祭』調査が、在来洞祭を神社・神祠化するという政策的利用の目的で行なわれたと指摘する。そもそも洞祭は、1912年の警察犯処罰規則[7]により民間信仰等が取り締まり対象になったことで大幅に縮小された（青野2015:255）[8]。洞祭ひいては農楽の衰退を決定づけたのは、ほかならぬ植民地権力であったのだ。しかし結果的に洞祭は一部黙認され、農楽は縮小しながらも存続した。

その後、農楽はかつてとは異なる形にならざるをえなかった。鄭は次のように描く。農村の生活環境は変化し、農楽は生活から遊離していく。継承する村は少ない。それでも継承できている村の特徴としては、比較的豊かであること、農楽を理解する長老がいる、優れたケンガリ奏者がいる、文化団体の積極的支援が入ること、などがある。近年は道（日本の県に当たる行政区分）や郡単位で農楽を存続させようとするところが現れ、農楽大会が開かれたり、農業高校に農楽部ができたりしている。しかし芸能の中の宗教性がなくなり、地域性が失われた。画一化が進み、単なる芸能に転落したようだと、鄭はいう（鄭昞浩1986:31-2）。

近年、継承にもつながる新たな動きがみられる[9]。たとえば2018年に行われた韓国のプンムルクッ学会（2011年発足）では、各国の韓国系移民や現地の人々による農楽活動の多様化に注目が集まり、また村落社会の持続が難しい現代の「村の無い村祭り」の伝承をめぐり、熱い討論が交わされたという（神野2018:163）。

3.2　日本における農楽の実践

朝鮮の植民地化から114年、解放からは79年になる。旧宗主国日本において農楽はどう展開しただろうか。実のところ筆者は、日本の農楽に関する研究や史料を収集中であり、全体像を描く段階には至っていない[10]。しかし日本に渡った朝鮮人たちは、規模はともかく、早くから農楽を実践していたようである。おそらく大々的に開催したり公的に注目されたりすることなく、肩身狭く、内輪で行なっていたと推測する。

農楽自体の先行研究は非常に限られるため、農楽を含む社会実践に広く目を向けることにしたい。そこで、社会学者の飯田剛史らの民族まつりに関する共同研究『民族まつりの創造と展開』を手がかりに、出し物としての農楽に注目する。飯田は、民族まつりを、「民族的マイノリティの住民が関与しつつ、「民族」ないし「民族文化」をテーマとして公共の場で催されるまつり」と定義する（飯田2014:1）。農楽は民族まつりの定番プログラムである。民族まつり自体の歴史は、浅いながらも質・量両面で大きなうねりがあり、随所で農楽が象徴的に登場する。まずは飯田の概観をたどろう。

在日コリアンが全国で最も多く暮らす大阪では、1980年代[11]に民族まつりが創始され始めた。それら祭りの特質には、「特定の宗教的伝統をもたない点、少数の個人の発意によって始められボランティアによる広がりを獲得したこと」があるという（飯田2014:5）。つまり世俗的な共同性が求心力となって、担い手・対象が広がってきたのだ。

先陣を切って1983年に始まった生野民族文化祭の場合、出演資格を韓国・朝鮮籍者に限った。日本人

および日本国籍帰化者は見物までである。在日コリアン二世の実行委員長は、飯田に、「これは抑圧されてきた在日の若者の自己表現であり、趣味で韓国舞踊を習っている日本の人と一緒にすることはできない」と語ったという。祭りが10回目を数える頃、彼はある雑誌の記事で次のように書いている。自分は朝鮮人であることで幼い頃から差別され、朝鮮人であることを隠しながら成長した。第一回の祭りで民族衣装を身に着けてパレードの先導役を務めた時、なかなか足を踏み出せなかった。体が拒否反応を起こしたのだ。押し出されるように第一歩を踏み出した時の「全身に流れた震えは、今鮮やかに残っている」。これを引用しながら飯田は、民族まつりがそうした強い緊張と決意をもって創始され、出演に至った背景として、「周囲の差別的な日本文化ないし日本人社会」の存在を指摘した（飯田2014：7-8）。

生野民族文化祭の中心的演目は農楽とマダン劇であった。次は、農楽を導入した過程に関する説明である。

> （中略）花見や宴会でチャングを叩いて歌い踊る風習は、在日一世たちのものであったが、二世たちは民族音楽や舞踊を民族系学校や公立学校の民族教室などで習った。
>
> 一方、1970年代の韓国では、急速な都市化と地方農村の衰退に対する反作用として、国家や地方政府により各地で民俗文化祭が催された。伝統文化の見直しと再評価が行われ、無形文化財や人間国宝の認定がなされた。その中で全羅南道の農楽がとくに色彩が豊かでダイナミックなため、韓国の代表的な伝統民俗文化として認識され全国に広まっていった。
>
> 他方、韓国の軍事政権に対する民主化を求める学生運動の街頭デモにおいて、民俗楽器やマダン劇による表現が伴われた。（中略）日本には梁民基によって大阪、京都の朝鮮文化研究グループに紹介され、新たな劇の創作と上演活動が始められた。
>
> 民族系学校などで伝統の歌舞を習った人の中から、農楽を専門的に習得するために韓国に留学し、日本に戻って演者や教師になる人も現れた。（中略）生野民族文化祭は、一つのリーダーシップのもとに、ばらばらに行われていた民族文化運動グループを連結することによって構成されている。（飯田2014:6-7）

民族まつりを始めた在日コリアン二世たちにとって、民族をテーマとするまつりも農楽も、もともと自分に根付いていたものではなかった。親世代がやるのを横目に、学校で習ったり、韓国から伝わったり習得してきたりして、改めて学んだものだ。だからこそ、一から体得し、実践・継続に費やすエネルギーは、相当大きなものだったと思われる。

生野民族文化祭は2002年に終了したが、生野民族文化祭に触発されて1990年代以降、民族まつりが続々と現れた。全国の「民族まつり／マダン開始年表」（2014年1月27日版、藤井幸之助作成）によると、総数121の民族まつり創始年は表２の通りである。

表２　民族まつりの創始時期

1990年までに創始	1991-2000年	2001-2010年	2011年-調査時点	計
20（12）	46（39）	45（41*）	11	121（92）

（出所）飯田（2014:23-26）より作成。（ ）はうち在日コリアン関連の民族まつり。
*2001-2010年の（ ）内は2011年以降も含む2001年以降の数値。

民族まつりが展開した背景として、飯田は、①1980年代の民族差別反対運動の盛り上がりが市民共闘やマスコミの支持を生み、民族文化を求める動きにつながったこと、②在日コリアンの生活文化が日本人と均質化したことで、共通基盤を前提に民族文化の「差異」を主張しやすくなったこと、を挙げる。そして1990年代以降の民族まつりでは、農楽が中心的演目であるなど内容的には生野民族文化祭を受け継ぐ一方、担い手に日本人やニューカマー外国人も加わった点で大きな転換があった。しかも、地方自治体の後援や助成を受けるなどして「公共化」が進み、スローガンに「多文化共生」を掲げるまつりが登場してきた(飯田2014:26-35)。

ここでは農楽が、民族文化の表出しやすさが変わる民族まつりのなかで行われてきたことだけ確認しておきたい。そこで浮上した共同体哲学とは、民族や世代やそれらに伴う差異を超えて「地域住民の共生を目指す」(飯田2014:10)というものであった。多文化共生を標榜することにより在日コリアンの人権運動が骨抜きになったのか、あるいは人権意識と相互理解を幅広く高める役割を果たしたのか、今論じる準備はない。ただ、農楽の担い手たちに注目すると、その意志や努力に気づくのだ。

4　新聞記事から捉える日本における農楽の担い手と関係形成

自らも演奏する文化人類学者の神野知恵にとって、農楽の面白さは、演奏者それぞれに癖がありながら[12]、「共に演奏するときには一体感が感じられる」(神野2016:54)点だという。神野は韓国への交換留学中に農楽と出会い、自身の研究テーマとした。そのように新たな参加者を取り込みながら、農楽は各地で続いてきた。

では日本ではどうだろう。農楽が共同体を維持したり、新たな関係が生まれたりするその場の具体的状況はどんなものか。現地調査を行う準備作業として、本章では、日本における農楽というフィールドをおおまかに捉えたい。そこで農楽に関する新聞記事のごく簡単な内容分析を試みる。

ここで用いるのは、朝日新聞社のオンライン記事データベース「朝日新聞クロスサーチ」である。一定の制約があることに留意を要するが、創刊号(1879年)からの記事を検索し、読むことができ、注目したいトピックの長期的趨勢をつかむ上で有用である。新聞記事特有の制約とは、記事になりやすい話題[13]というものがあり、たとえば同じイベントが繰り返し登場する傾向があること、記述内容が記者の理解に左右されることなどである。

「農楽」または「プンムル」を検索語としてヒットした記事は、重複分を除くと計302件であった。ここから、全く関係ない記事(固有名詞「農楽園」など)や全く同一内容の記事(複数県の地方版に出るなど)および海外情報を合わせて26件、韓国から招待した団体・個人による演奏・公演76件を引くと、200件となる。これが、日本における日本在住者が担い手となった農楽に言及がある朝日新聞の記事数である。

まず全302件を記事掲載年でみてみると、初出は1986年の韓国情報であった。日本の記事は1987年の東京国立文化財研究所芸能部長によるコラム記事に始まる。愛知の在日韓国人青年グループの情熱的な演戯に感動したという内容だ。年代で分けると、1980年代9件、90年代172件、2000年代89件、2010年代以降32件であり、1990年代とりわけ90年代後半と、2000年に多かった[14]。記事の舞台は38都府県

にわたる。

次に、日本における農楽記事200件を行事開催地・団体活動地域別にみてみよう。近畿勢の記事が圧倒的に多く109件（大阪41、兵庫36、京都32）、次に三重15があり、それから関東勢の神奈川14、東京13が、そして福岡10が2桁台で続く。1桁台では多い順に愛知8、山口7、埼玉4であるが、12県は、韓国からの招待・公演等を引くと記事がゼロになる。なお独立した農楽グループ名が全部で16登場し、各地に散らばって活動しているようだ。

200件を農楽出演者で分類すると、地元民・団体・在日プロ奏者が90件と多い。あとは民族学校・民族学級29、地元学校や保育園30、民族組織（総連・民団）21である。地元の保育園・小中学校が民族学校と同じくらいあるのが注目される。

さらに記事内容をみると、地域ごとの特徴がうかがえる。近畿地方は全体的に多いが、とりわけ地元民・団体が演奏する祭りの記事が目立つ。同じ近畿内でも、大阪では民族まつりや公立学校関係が中心で、京都はウトロ地区関連（立ち退き裁判・平和祈念資料館）が3分の1を占め、兵庫は各種「マダン」まつりが併存するほか高校生や朝鮮学校の交流が頻繁にある、などである。近畿のこれらの背景には、戦前の軍需産業や、日頃の学校教員らの在日外国人教育実践などが考えられる。関西に比べて、関東は単発的かつ多様で、ややつかみどころがない。あえていえば、神奈川は子ども・若者・社会教育関連の事業が多彩で、東京は実にさまざまなイベント（在日舞踊家有志企画、関東大震災追悼、ニューカマー対象）がみられる。三重の記事ではある個人の実践が大半を占め、その他の地方では、朝鮮学校や各種施設を核とするイベント、また活発な個人・グループの継続的活動、そして江戸時代に朝鮮通信使が通過した岡山・広島・滋賀・福岡の記事が定番になっている。

１つだけ記事を紹介しよう。1993年12月2日夕刊に、「南北朝鮮、『統一の舞』　在日の舞踏家が日比谷で舞台」と題された記事がある。韓国舞踊団を主宰するPさんと、朝鮮総連傘下の金剛山歌劇団に在籍するLさん。ともに東京在住の舞踊家で、舞台を見るなど互いの存在はよく知っていたが、前年に偶然出会い、「思想や立場の違いを超えて、南北の舞踊家が個人レベルで参集してひとつの舞を演じよう」と意気投合した。仲間に呼びかけると50人近くが参加することになった。民族性を重視した南北の代表的作品から演目を選び、フィナーレでは「農楽舞」を全員で演じる。10日後に日比谷公会堂で催される「第一回在日コリア民族舞踊フェスティバル―統一の舞」は、「北朝鮮の核疑惑などで南北関係が冷えている時でもあり、反響を呼びそうだ」と、記事は伝える。

このイベントは翌年第2回が開催された。互いの存在を知る在日コリアン同士でありながら一線を画していた2人が、共通の専門領域で仲間も加勢して共同事業を行なうことになったという展開の意味は小さくないのではないか。フィナーレの農楽舞は、その瞬間だけでも成立した共同社会を象徴する。このような記事が『朝日新聞』には多数掲載されてきた。

5　おわりに

何らかの共同体哲学から生み出された農楽は、その内容や担い手が移り変わりながらも続けられてき

た。日本に渡った朝鮮人たちの農楽活動は、長い間不可視的であったものの命脈を保ってきたのだ。そして1980年代以降、変わりゆく社会状況の中で新たな形・参加者を取り込んで存在感を高めてきた。それがどんな共同体でどんな意味をもつのか。今後は現地調査しながら、より核心に迫っていく考察を行ないたい。

最後に、本稿で積み残した課題をいくつか挙げておく。一つは、新聞記事の内容と歴史的出来事・社会状況との照合作業。次に、共同社会自体の変容を捉えること。また、農楽史料の不足を補うべく在日コリアンほか参加者らの証言を集めることである。とくに渡日初期の記憶の語りは貴重な資料になる。語り手たちの高齢化が進む中、急がなければならない。

農楽は今後も存続されていくだろうか。存続するには何が必要か。私を含む、日本のマジョリティでありかつ旧植民地宗主国民である日本人は、農楽にどう関わりうるか。チャンゴの練習と並行して、引き続き調査し、考えていく。

注

1） 現代韓国ではチャング（장구）と呼ぶのが主流になった（朝日新聞2004.8.5夕刊「チャング　朝鮮半島　踊り一体で、音降り注ぐ(民族楽器の旅)」)。同様の言い換えは、後述するように、本稿のタイトルにある「農楽」でも起こった。

2） 写真の楽器の名称は、左上から時計回りに次の通り。ケンガリ(小鉦)、チャンゴ、チン(大鉦)、プク(太鼓)、ナバル、テピョンソ(太平簫)、ソゴ(小鼓)。

3） たとえば地神踏(チシンバルキ)(僻邪神慶の厄払い)、豊漁祭(漁村の祭り)、軍物(クンムル)(戦で士気を鼓舞)、乞粒(クォンリプ)(村の公共事業のための募金に芸能集団が出動)などがある(金両基1966)。

4） 在日コリアンの民族団体の一つ。なお二大民族組織のもう一つに、在日本朝鮮人総聯合会(総連)がある。

5） 農村振興運動とは、1930年代に農業恐慌により小作争議が続発するなど壊滅状態に陥っていた朝鮮農村を救済し、侵略の強固な足場に編成することを意図して展開された総督府の運動(宮田1996:348)。

6） 心田開発運動は、神社の「朝鮮大衆の精神生活」への積極的関与を提案した(青野2015:68)。

7） 日本内地で1908年に施行された「警察犯処罰令」（戦後の軽犯罪法にあたる)に対応する総督府の法令。

8） 青野によると、村山が同書で提示したのは、結局のところ日本政府による部落祭の「国魂大神」奉斎案に対する否定的判断材料だった(青野2015:280)。

9） 農楽と混同されやすい「サムルノリ」にも触れておく。サムルノリ（四物遊戯）とは、農楽で使う4種の打楽器による演奏形態・演奏グループのことである（キム2007=2009:vii)。『民団新聞』ではサムルノリを次のように説明する。「農楽をベースにしながらも現代風にアレンジし、舞台芸術にしている。このグループが人気があったため、いつのまにか伝統打楽器を叩く集団をサムルノリと呼ぶようになり、一般名詞化されたようである」（民団新聞2014.11.5)。卓越した演奏技術と幅広い公演活動により、サムルノリは1980年代から広く知られる存在となった。この4人グループの中心的存在であるキム・ドクスは、旅芸人集団・男寺党の末裔で、幼少期から「農繁期になると豊作を祈願する儀式を行ない、心と魂を揺さぶる芸を披露して、村の雰囲気を盛りたてる役割を担った」という（キム2007=2009:7-8)。プロの芸能者でありながら、村の盛り上げ役のような共同体生活との微妙な距離

感を、サムルノリは内包している。しかし農楽の共同体性に関心を寄せる本稿は、サムルノリに深くは立ち入らないでおく。

10）若干の例外として、民族まつり研究の片岡千代子（2007）の東九条マダン楽器隊分析や、音楽人類学者の田中理恵子（2022）によるプンムル活動事例のウェブ論考がある。

11）飯田が注目する３つの民族まつりは、生野民族文化祭（1983-2002年）、ワンコリアフェスティバル（1985年-）、四天王寺ワッソ（1990-2000年、2004年-）である。民族文化祭の始まる文化的背景には、①1970年代以降の民族学校・公立校ほかにおける在日コリアンの民族文化運動、②韓学同（在日韓国学生同盟）などの組織の在日学生運動が政治主義から方向転換して民族まつりに向かったこと、③日本における古代史学・渡来人史研究の発展があったという（飯田2014:5）。②に関連して、玄善允（2014）は、梁民基を引用して韓学同、韓青同（在日韓国青年同盟）の文化運動との一定の連関を指摘する。また、韓国光州事件の衝撃が多様な方向性をもったこと、すなわち、民族運動に流れ込む層／距離を置く人々／文化運動や祭りといった「悠長な」イベントを軽んじる層への分化、を示唆している。

12）神野が著書で取り上げた女性農楽団もまた、「時代性、脱地域性、活動形態、ジェンダーなどの点で韓国農楽の伝承全体から見れば特殊な例」といえる（神野2016:54）。

13）農楽関連の記事は、公演、有名人・グループ、国際交流・朝鮮通信使・文化体験、朝鮮学校をはじめ学校ものの記事が多かった。

14）参考までに、他の検索語のヒット件数と初出記事の掲載年、タイトルを下に示す。

・「サムルノリ」474件：1983年「血わかせる打楽器　韓国のサムルノリ来日＿音楽」

・「キムチ」4336件：1925年「家庭／おいしいツケ物と温いなべもの　風変りの朝鮮料理」

・「チョゴリ」1740件：1960年「チョゴリ姿で　本社を訪問＿韓国学生使節」（ただし山の名称「チョゴ・ルンマ」がヒットした記事（1941年）を除く）

これらと比べると、「農楽」「プンムル」記事は相対的に少なく、登場も遅いことがわかる。

引用文献

青野正明，2015，『帝国神道の形成――植民地朝鮮と国家神道の論理』岩波書店.

鄭昞浩，1986，『農楽』悦話堂.

朝鮮總督府，1937，『部落祭』（朝鮮の郷土神祀第一部 調査資料第四十四輯）

玄善允，2014，「在日の精神史から見た生野民族文化祭の前史――在日の二世以降世代の諸運動と『民族祭り』」飯田編（2014）所収，pp.41-62.

飯田剛史，2014，「『民族まつり』の展開と課題」飯田剛史編『民族まつりの創造と展開　上 論考編』（JSPS科学研究費基盤研究（C）研究成果報告書）.

임영상・주동완 외, 2015,『코리안 타운과 축제』북코리아.

神野知恵，2016，『韓国農楽と羅錦秋――女流名人の人生と近現代農楽史』風響社.

神野知恵，2018，「現場と研究者をつなぐ――韓国農楽の2010年代の研究動向」『民博通信』163:163.

片岡千代子，2007，「在日コリアンの祭りにおける多文化共生空間の創成：京都「東九条マダン」の楽器隊を事例に」名古

屋大学大学院文学研究科教育研究推進室『メタプティヒアカ 名古屋大学大学院文学研究科教育研究推進室年報』1:70-80.

キム・ドクス(清水由希子訳)，2007=2009，『世界を打ち鳴らせ――サムルノリ半生記 キム・ドクス』岩波書店.

金両基，1966，「朝鮮の農楽の本質とその由来について」『日本演劇学会紀要』8:17-20.

宮田節子，1996，伊藤亜人ほか『朝鮮を知る事典』平凡社，p.312.

田中理恵子，2022，「街に出よ――芸能愛好者の語りと地域実践の手ざわり」『〈アートするウェブマガジン〉－オイド SPECIAL ISSUE #1』（URL取得日2023.9.11）
https://journal-oid.org/contents/%e8%a1%97%e3%81%ab%e5%87%ba%e3%82%88%e2%94%80%e2%94%80%e8%8a%b8%e8%83%bd%e6%84%9b%e5%a5%bd%e8%80%85%e3%81%ae%e8%aa%9e%e3%82%8a%e3%81%a8%e5%9c%b0%e5%9f%9f%e5%ae%9f%e8%b7%b5%e3%81%ae%e6%89%8b%e3%81%96/

吉田光男，1996，「洞」伊藤亜人ほか『朝鮮を知る事典』平凡社，p.312.

ウェブサイト

民団新聞2014.11.5「生活に根付いた総合芸術，農楽を知ろう」（2023.12.1 URL取得）
https://mindan.org/news/mindan_news_view.php?cate=2&number=25539

野村伸一「村山智順所蔵写真選」（2023.12.1 URL取得）
http://web.flet.keio.ac.jp/~shnomura/mura/contents/murayama.htm

（付記）

本稿執筆中に在日朝鮮人史研究会で報告し、貴重なコメントをいただいた。

お世話になった岩間暁子先生。安らかに眠られますよう、祈念申し上げます。